

# 手広中学校の生徒が脱穀を体験

## 自主保育の子どもたちも加わる

手広中学校の生徒18人が10月21日午後、「ふれあい体験学習」で緑地を訪れて脱穀をした。3班に分かれ、①脱穀②穂に残った籾を回収③脱穀機から出る籾の処理——の3作業を交代で担当し、4袋・約56キロの籾を「生産」した。

まず、男子3人が大屋進さんの指示で、脱穀機の重いエンジンを物置から運び出し、女子15人がその間に、はさに掛けてあった稲束を下ろし、広場の真ん中に据えた脱穀機のそばに運んだ。そして大屋、小坂さんが見本を示し、脱穀を始めた＝写真右。



はさに残っていたのは、新田んぼ1.2アールで収穫し

たもち米。朝から霧雨が降り続き、籾が湿っていて脱穀機内で滑りが悪く、また、稲束をしっかり握っていない生徒の手から、稲が脱穀機にからめとられたりして、想定以上に時間がかかったが、生徒たちは穂に残った籾を指でしごいて回収する作業にも、熱心に取り組んだ。

自主保育でんでんむしの子どもたちが来ていて、途中から中学生たちの作業に加わった。生徒たちは「弟妹たち」に要領をやさしく教えていた＝写真左。



2時間余りで全量の脱穀を終えた。56キロの籾からは、籾殻、米ぬかを除いて、35キロ以上の白米が残る見込みで、11月20日(土)に催す収穫祭で、お餅を搗くには十分な量だ。

小坂、野村紀子さんが生徒たちの来る前に、おにぎり80個余りを用意していた。脱穀を終えた生徒たちは、枝に雨除けのシートをかぶせた木陰で、おにぎりにかぶりついた。

田んぼ班とは別に、水辺の生き物観察班の16人も訪れ、久保廣晃、野村さんが案内した。その16人も同じ時刻に観察を終え、おにぎりに合流した。